

# Gallery 愛海詩

えみ

## たくみ工房 高橋 太久美 切子硝子 作品展 1月6日～1月18日

彩遊の号 No.13  
愛海詩の会  
会報  
平成26年12月30日発行  
編集発行人/ギャラリー愛海詩  
佐藤 睦子  
〒064-0821  
札幌市中央区北1条西28丁目2番17号  
TEL・FAX/(011)613-1112  
WEBSITE  
http://www.emishi-s.com  
E-mail:kougei@emishi-s.com



(写真上) 高橋太久美氏

平成二十七年のはじまり  
「春風再来」それぞれの胸に新しい年の光が灯りました。その皆様の胸の内にも、今、どのような思いが過ぎつておられるのでしょうか。  
愛海詩の会の会員の皆様、そして、ギャラリー愛海詩に心を寄せて下さる方々、本年もどうぞ宜しくお願い申し上げます。職人や作家達は、相も変わらず厳しい世界におられますが、私は今年も多くの方々に感謝しつつ、その手技の灯を消さぬよう、祈りのような心を持ち大切にしながら、そしてまた、互いに良い左様、仕事を成すために、しっかりと見つめる目と心を持っていたいと思います。会員の皆様、お支え下さっている皆様には豊かな時を持っていただこう、その空間と作品を楽しんでいただこう、調えたいと思っております。今年の作品展も含めて、愛海詩の企画を楽しみにしていただき、また、ことあるごとに足を運んで下されば幸いです。

人生をマラソンに例えれば、私は折り返し地点をとうに過ぎておりますが、未だに考えも及ばない事、人と出会うこともありますし、ふわっと心豊かになる時もございます。その出会いはいずれも自分への教えであることを今一度、少し深く考えて行き、仕事にあるべき今に活かして行こうと思っております。そして、今年も出会う方々から、その人が咲かせようとしている、あるいは咲かせている、その人自身の心の華を楽しむ心を持ち、佳き出合いを重ねたいと思っております。いつもこの新しい年を迎えるにあたりはどんな年になるのかワクワクします。それはきっと自分次第というところがあるかもしれません。

皆様にとりましても、健やかで、希望に充ちた年でありませうよ心より祈念いたします。  
(佐藤 睦子)

- ### 略歴
- 1941年 大阪に生まれる
  - 1958年 清風高校卒業後、伯父の工房「新庄カット」入社
  - 1964年 「高橋ガラス加工所」として独立
  - 1980年 由利精助氏（薩摩切子の第一人者）に師事
  - 1982年 薩摩切子の復元をはじめ
  - 1985年 「薩摩切子復元名工三人展」京都高島屋
  - 1994年 日本伝統工芸近畿展 入選（以後10回入選）
  - 2000年 新美工芸展「読売文化センター賞」受賞
  - 2002年 新美工芸展「大阪府知事賞」受賞
  - 2006年 新美工芸展「大阪市長賞」受賞
  - 2006年 A21国際美術展（ドイツ）出展
  - 2009年 大阪梅田阪神百貨店美術画廊で個展
  - 2011年 パリで門下生二人と「切子三人展」

ご挨拶 作品展によせて  
カットマシンに向かい、全神経を手元に集中する。全てを忘れ、切子ガラスの作品作りで没頭する。作家として、五十五年間切子硝子一筋に研鑽を積んで来ましたが、私は、「たくみ工房」切子ガラスの工芸研究所も主宰しております。後に続く人達にも、その技を伝えたいと励んでおります。また、伝統ある薩摩切子を蘇らせた技、培ってきた技術を駆使して、切子の未来への潮流を生み出そうという思いもあります。自分しか出来ないこと、自分らしくということを常に考えて仕事に向かっています。特に「あじろ」「シリーズ」「ほたる」「シリーズ」「モザイク」シリーズは私らしい仕事といえ、他の方の追随を許さないところの仕事とも言えます。江戸切子でもなく薩摩切子でもなく、今までなかった切子の世界を伝統の技を大切にしつつ、開拓しております。私の主宰する「たくみ工房」では、薬品でガラスの表面を溶かして磨く「酸磨き」ではなく、「手磨き」にこだわっています。手間はかかるのですが、鋭いエッジが産まれ、そのカットのシャープさがまるで違うのです。そういったことも含めて、どうぞ私の作品を間近に見ていただきたく思います。一人でも多くの北海道、札幌の方々にご高覧いただけることを願っています。  
(切子硝子作家・高橋太久美)



盃 各種 右はしの「あじろ」金赤 巾6.6cm×高さ5.0cm  
掌の玉のような作品です。どのようなお酒でもおいしくいただけるのは間違いありません。今年のお祝い、プレゼントにも喜ばれるかと思えます。小さな作品ですが、カットの技が光ります。



天開ロック「あられ」 巾8.7cm×高さ8.7cm  
なつかしさと新しさとが入り交じったカットは圧巻です。ソーダガラスを使用しています。使うごとにその輝きに魅了されそうです。まるで、ぬくもりのある、心あたかくなる「あられ」が手中におさまるかのようです。



脚付杯「薩摩復刻」 口径7.2cm×高さ16.2cm  
ただそこにあるだけで、時代を越えて来た物語を語ってくれるような気がします。「薩摩復刻」薩摩ブルーの堂々たる威風を現代に放っている。ゆったりと楽しむ杯、全体の削りの技にはため息が出ます。



タンブラー「ほたる」 巾7.5cm×高さ11.3cm  
この金赤の色の深さには目を見張ります。美しい空気、水の輝きを写しとったような作品です。その輝きは高級クリスタル24%を使用ということもあります。ほたるがもつ光を作品の中に。その高度な技が戒せるものとしてガラスの光は自由に遊んでいるかのようです。



香炉 巾10cm×高さ13.3cm  
健やかで、清々しい作品です。そこにあるだけで、さわやかな風が吹いてくるような気もします。光をあつめ、風を呼び、その香炉の作品はただそこに静かにたたずんでような風情が見られます。



オールド「亀甲」 巾8.7cm×高さ8.8cm  
この琥珀色の落ち着いた大人の時間を運んでくれます。1つ1つの「亀甲」の削りの技には感嘆します。どこまでも深く、どこまでも静か、その深淵をのぞいた時、新たな思索が思い立つかもしれません。使ってみたい、側に置きたい作品です。

### 切子の歴史

江戸時代中頃、長崎へ伝わったカットガラス「切子」はまず大阪で作られ、やがて江戸へ伝わって「江戸切子」として花開きました。江戸時代末には薩摩藩が産業振興のため江戸切子の影響を受けながら透明ガラスに色ガラスを重ねて作った生地にカットを施した「薩摩切子」を生み出しました。日本人独特の感性に裏打ちされた薩摩切子は高い技術と美しさを誇りましたが、幕末の動乱の中、短命の内に廃絶してしまっただけです。滅びた薩摩切子は百数十年以上長らく忘れ去られていましたが、20世紀末に再び見直され、その美しい姿を蘇らせたのです。



花器「あじろ」 巾15.0cm×高さ24.4cm  
この花器「あじろ」には度肝を抜かれてしまったといっても過言ではありません。高橋氏が技の魔法をかけたような作品です。この作品をご覧になった方はその楽しいマジックのような作品に微笑みと驚きと、その作品の素晴らしさについて入ってしまうものに違いありません。どんな花を活けてもどんな場所でも美しく、ひかえめだけれど雄弁な作品です。



香水瓶 巾10.0cm×高さ22.0cm  
気品ある佇まいで凛とした風情の作品です。香水瓶なのですが、何か別なものでも入れて楽しみたいと思わせます。美しい金赤、全面に難しい削りを駆使しています。一瞬の迷いも、ゆるみも戸惑いもない逸品です。

切子硝子作家、高橋太久美氏、ギャラリー愛海詩、そして北海道、札幌で初めての作品展です。香炉、高杯、盃、タンブラー、オールド、ぐい呑、皿など約五十点を展示しております。

先日、仕事で関西に行った折に、「結」というギャラリーに立ち寄りしました。愛海詩のようにあまりに広いギャラリーはないけれど、キラッと光るものがありました。それが高橋太久美氏の切子硝子作品と出合った瞬間でありました。その作品の美しさに、驚きとよるこびが込み上げて来て、心が踊りました。店主の金子様とお話しし、今回のご縁が正に「結」、結ばれました。お電話で話をすると高橋太久美氏は、思った通りの方でした。とてもはげれの良い職人気質の方で、切子硝子の仕事、ご自身の天命のように思われているような仕事振りで、切子の世界にはいて五十五年、百数十年前に途絶えた「薩摩切子」の復元、二十世紀の現代に蘇らせたすばらしい技を持つ一人です。名工、高橋太久美氏の研ぎすまされた技と感性、その真髓をゆつたりとした心持ちで拝見して下さい。切子硝子は四季を通して、そして冬こそこの深みのある光のプリズムを楽しんでいただきたい。「たくみ切子」は美しい光を放ち、心がホッとあたたかくなるような作品です。この素晴らしい作品を札幌で紹介できるのを、うれしく思います。お運び下さいませ。

＝お知らせ＝  
平成27年1月5日（月）まで、ギャラリー愛海詩は不定休です。この期間、いらっしゃる折にはお手数ですがギャラリー愛海詩にご連絡下さいませ。1月6日（火）から通常通りオープンさせていただきます。